

シャークハンター

衝動の中に灯火は宿る

前編

おいがつお

I

日本の最重要都市であるウエノシテイを、はるか南に見下ろすような格好で、タカオ・マウンテンはそびえたっている。

広大なタカオ・マウンテンには、かつて天狗が存在した。太古のウエノシテイを描いた古文書の一節には、そう記されている。

天狗は超常的な力を持った、日本の著名な妖怪である。天狗の神秘的なご利益にあやかり、多くの人々がタカオ・マウンテンを訪れた。

スピリチュアルな空気に溢れた神聖な山——というタカオ・マウンテンのイメージも、もはや過去の話である。

世界中を巻き込んだ、ヒト対サメの大戦。世紀末めいた戦禍は、当然のごとくタカオ・マウンテンにまで及んだ。

タカオ・マウンテンで暴れまわったのは、カゼ・シャークの中でも上位の存在とされる、タイフウ・シャークと呼ばれるサメであった。タイフウ・シャークは嵐を呼び、美しい紅葉の映える木々をなぎ倒した。人々の防衛

線をいともたやすく吹き飛ばしたタイフウ・シャークは、タカオ・マウンテンの地形を大きく変えてしまったとされている。

タイフウ・シャークの風を操る力は、奇しくも天狗が持つとされる能力の一種と酷似していた。

そんな強大なタイフウ・シャークであったが、これはサメの一戦力に過ぎなかった。陸海空、あらゆる場所でサメたちは暴れまわった。

人類の逃げ場は、どこにもなかったのだ。

種々様々なサメたちが、人間たちに等しく絶望を振りまいた。それはまるで、この世そのものが地獄と塗り替わってしまったようであったと伝わっている。

それでも、人類は生き残るために戦い続けた。地球全土を、血と汗とフカヒレで散らすことになりながらも、長き年月の果て、人類は勝利を収める。

それが過去最大の戦争とされる、世界シャーク大戦である。

それからさらに月日は過ぎたが、タカオ・マウンテンは、およそ人が住める場所ではなくなっていた。

まず、かつてのなだらかな山道の大半は、世界シャーク大戦の影響で消し飛んだ。山頂に到達するためには、落石の恐れがある山道や、ロープがなければともに登れぬ険しい崖を越えねばならない。

それだけではない。タカオ・マウンテンには、前時代

の忌むべき人造生命体——凶暴な野良巨大ネコや、体当たりで人間をたやすく殺すニホンバイソンが跋扈しているのだ。

軽い気持ちでタカオ・マウンテンに入ったが最後、どこかで足を踏み外し、岩に頭を打ちつけて息絶えるか、あるいは何かの生き物のエサとなるであろう。

しかし、そんな魔境と化した山に、一つの拠点を構える者たちがいた。

その者らは、古くから伝わる天狗ではなかった。さりとて、前時代にタカオ・マウンテンを支配した純正リアルシャークでもなかった。

彼らは、かつて存在したリアルシャークの魂——シャーク因子を宿したシャークノイドであった。

剣呑な巨大猟銃をかまえ、邪悪なバックパックを背負った二人組が、タカオ・マウンテンの中を歩いていた。

「クソッ、今回はなかなか獲物が現れねえ」

「このままじゃ赤字だぜ」

男の一人が、邪悪なバックパックから塩ガムを取り出

し、口に放り込んむ。

タカオ・マウンテンを登山、およびこの地で猟をするためには、許可証を所持せねばならない規則がある。だが、実際に許可証を取るためには、多額の資金が必要であった。

ゆえに、数少ないタカオ・マウンテンの登山者の中でも、実際に許可証を持ってタカオ・マウンテンに登る者はさらにごく少数だ。

実際この男らも、タカオ・マウンテン違法侵入者のうちの二人であった。

「ニホンバイソンは高く売れるからな」

肉は食料、毛皮は衣服、油は燃料、どこをとつても資源となり、その身体には一切のムダがない。歩く宝の山、それがニホンバイソンだ。

二人が背負った邪悪なバックパックの中には、頑丈なロープや万能ナイフ、懐中電灯などがしまわれている。

彼らがそれなりの経験を積んだ、ニホンバイソンをもつぱらの標的とする密猟者であることを物語っていた。

「だいぶ歩いてきたんだが……バイソンの歯形がついたリングを見つけてからどれだけ経った？」

「あ……」

クチャクチャと塩ガムを噛みながら、男が腕時計に目をやる。

現在、二人が歩いているこの場所は、車で進めないほ

どの森の中である。密猟者たちは車を降りてから、一時間以上は優に歩いてきた。

「リングゴを見つけてからだろ？ それなら……四十と五分だな」

「だが、ここまで足跡はなかったよな？」

「ああ。なんか、いつもよりも手ごたえがねえ」

「プツ、と男が塩ガムを吐き捨てた。ぺちやり、とガムが木の幹にくっつく。」

「他の密猟者が狩つちまったのか？ それで、バイソンの数が減った」

「だとしたら迷惑な話だ。勝手に俺たちのモンを獲るなつて言いたいぜ」

「決まりつてもんをわかってねえよな」

もう一人の男も塩ガムを吐き捨て、続けざまに新しいガムを口に入れようとした。

だが、そうする前に二人は立ち止まった。

生き物の気配がしたのだ。

それも、小鳥や小動物といったつまらないものではない。もつと違う何かである。

「来たぜ……！」

二人の思考は狩りのそれに切り替わった。

獲物を見つけるまでが狩りの本番、そしてここからも本番だ。

密猟者たちは、自らの猟銃に弾丸が込められているこ

とを確かめる。分厚い毛皮と脂肪を貫通する威力を誇る、ニホンバイソンを狩るための危険な猟銃だ。

「気配はあの先だ」

「ああ」

密猟者たちは慎重に歩を進める。ニホンバイソン一体を仕留めれば、取り分を山分けしても一カ月は遊んで暮らすことができる。

今にも大金を手に入れんとする俗的な笑みをこぼした二人。

そこに、ふっと差しこんだ影。

「なんだ？」

ここは森の中である。頭上を覆う木々のおかげで、直射日光を受けることはない。

だが、この影は、そういった枝葉の作ったものではなかった。

「コケーツ！」

木の上から降り立ってきたのは、一羽のニワトリ。

羽毛はかなり灰色がかっている。汚れではなく、これが本来の色らしい。また、普通のニワトリと比べると、かなり大柄な体をしていた。

影の正体はこいつのようだ。

「ニ、ニワトリ？」

密猟者たちは、すっとんきような声を上げる。

「なんでニワトリがこんな場所にいるんだ？」

「知らねえ。だが金にはならねえだろ。ほっとけ」

ちよつとばかり毛色が違おうが、少しばかり大きからうが、ニワトリはニワトリだ。フライドチキンなど、その辺で買うことができる。

持ち帰っても二束三文の値しかつかないだろう。

目の前の動物に興味を失った密猟者たちは、ニホンバイソン探しに戻ろうとした。

「コケーツ！」

一声、ニワトリが鳴いた。

これから起こる地獄の始まりを告げる合図であった。

揺らぐニワトリの影。本体は動いていないにもかかわらず、である。

一人でうごめく影は、灰色のニワトリを包み込む。

影に覆われて真っ黒になったニワトリは、さながら生きた影絵のようだ。

そして、おお。その影が晴れ、中から現れたのは。

サメを彷彿とさせる戦闘服、シャークスーツに身を包んだニワトリであった！

「サ……………」

まさか、そんな。

こんな場所です。

「サメエエエエ！」

男たちは悲鳴を上げた。

山の中でサメに出くわしてしまったのだ！

「コケーツ！」

ニワトリは……シャーク因子に捕食されしシャークノイドと化した恐るべきニワトリは、地面を蹴り、密猟者の一人の首に右足を叩きこむ！

「サメエツ……………」

即死！ 男の首が宙を舞う！

「サメエエエエエ！」

反乱狂になったもう一人の男が、ニホンバイソン狩猟銃の引き金を引く。

しかし、発射された弾丸は、ニワトリの体を貫くことはなかった。

黒い大きな影が、本体と独立したようにして動いたニワトリの影が、白羽取りの要領でもって、手羽で銃撃を防いだのだ。

「サメエエエエ！」

悲鳴を上げ続ける密猟者。

ムリもない。かつて世界を血と汗とフカヒレに染め上げたサメの恐怖は、今なお人類の心の奥に潜んでいる。

滅んだとされる凶悪なサメに突如として出くわしてしまえば、その恐怖が発現するのは自明の理なのだ。

「サメエエエエ！」

後ずさりながらニホンバイソン用猟銃を乱射する男は、

「サメツ？」

ドン、と背中から何かにぶつかった。

男は振り返る。

そこに立っていたのは、また別の恐怖であった。

「サッ……」

男を見下ろす、二足のウマのような生き物。ひよる長い手足の先には、ひづめの代わりの太い三本の指。なによりも目に付くのは、灰色のニワトリと同じような戦闘服を――サメへの恐怖を掻き立てるようなシャークスーツを身にまとっていることだ。

すなわち、この謎のウマもシャークノイドなのだ！

「サメエエエエ！」

哀れに叫ぶことしかできない男に、二足のウマは回し蹴りを放った！

「サメッ……！！」

やはり即死！ 男の首が宙を舞う！

首から上を失った人間の体二つが、どさりと仰向けに倒れた。

一瞬にして、密猟者たちは死んだ。

ニワトリが密猟者たちを見下ろす。

その後。

「ナイスだぜ、ジャビー！」

謎のウマを見上げると、口を開き、しゃべった。

「やった、た」

ジャビーと呼ばれた謎のウマは、嬉しそうに両手を挙げる。

「ま、シャークノイド相手じゃなければ俺一人で十分だろうけどな！」

自らの影を元に戻し、ふんぞり返るニワトリ。彼は自信家であった。

手際よく密猟者たちを狩り返した二匹のシャークノイドは、ごそごそと獲物の荷物をあさり始める。

剥ぎ取りの時間だ。

手分けして作業をする二匹。

「ダグ、財布、ふ」

やがて、ジャージーデビルというシャークネームを持つウマのシャークノイドが、密猟者のふところから財布を抜き出した。

「えらいぞ」

財布を受け取ったニワトリのシャークネームは、ダークレグホーン。

彼は財布の中身の札を数え始める。

「ひーふーみー……」

ダークレグホーンはジャージーデビルよりも高い知能を誇る。そのため、このようなお札の足し算をこなすことも可能であった。

「……こりや久々の収穫だぜ！」

「お金、いっぱい、い？」

「ああ！」

ダークレグホーンは、ジャージーデビルに自前のリュ

ツクサツクを下ろすように命じた。

「これだけあれば、この前に穴の開いちまった鍋なべを買い替えても、まだ金が余るぞ」

「オカシラ、喜ぶ、ぶ？」

「喜ぶに決まってるさ！」

リュックサツクに戦利品を入れるダークレグホーン。

そしてジャージーデビルがニコニコとしながら、リュックサツクを背負いなおした。

タカオ・マウンテンにやってきた密猟者を狩り返したこの凶暴な生き物たちは、ただの野生動物ではない。かつて暗黒サメ組織の手によってアニマルシャークノイドと化した、元実験動物である。

当然、彼らとて望んで実験動物となったわけではない。しかし、何の因果か彼らは冒瀆ぼうとく的な実験の被検体となり、組織の手足として、戦闘兵器シャークノイドとして「使う」ことを目的に造られた。

だが、彼らはそれを良しとしなかった。ただ道具として使いつぶされるなど、まっぴらごめんであった。

自由を求めた彼らは、暗黒サメ組織であるトリノスナ研究所を脱走。野生の中で生きることを選んだ。

そうしたアニマルシャークノイドたちによって構成さ

れたのが、小規模サメ組織（ワイルドブレイメンズ）である。

「変な生き物が出ただと？」

タカオ・マウンテンの奥地。ひっそりともつた茂みをかき分けた先に、（ワイルドブレイメンズ）の現隠れ家たるほら穴がある。

ほら穴の中では、ブレイメンズメンバーからの報告を神妙な面持ちで聞く者がいた。

「どんなヤツなんだ、その生き物は」

ボロボロのコートを身に着けた、ガタイのよい長身の男。彼こそが（ワイルドブレイメンズ）内で唯一人間を素体として造られた者にして、この独立独歩の組織のボス、シャークノイドのバイタリテイなのだ。

「ウワサによると、なんでも、丸っこいへびみたいな姿をして、夜中に人を襲うらしい」

「ふむ」

「人間たちは、この生き物のことを……ツチノコ？ とかって言ってたんだ」

バイタリテイに報告を行っているのは、大柄な二足の柴犬のようであった。当然ながら彼も単なる柴犬ではなく、研究室で生まれたシャークノイドである。

シュワチ・シャーク因子の捕食者たる彼の名はウルトラファイド。実質的な組織のサブリーダーだ。

「どこで出たんだ、そのツチノコは」

「隣町。ツチノコはタカオ・マウンテンに住んで、人を食うために町に下りてきてるとかってウワサだぜ」

「冗談じゃねえ」

あぐらをかいた組織のボスがほおづえをついた。やや前傾姿勢になるバイタリテイ。

「そんな妙なヘビもどき、さっぱり山で見てねえぞ」

タカオ・マウンテンでよく見かけるヘビのような生物としては、巨大アオダイショウがいる。ヘイルドブレームズ」の主要な食料となる動物の一体だ。

しかし、ウルトラファイドが言うような丸いヘビは、一切報告に上がってきいていなかった。

「昔天狗がいた山だからって、ツチノコまでいるわきゃあねえだろうが」

「ウワサに尾ひれがつきについて、こんな根も葉もない話ができたらどうな」

ほとんど普通の柴犬と変わらぬ容姿のウルトラファイドは、ただの犬のふりをして人の目をごまかし、山を下りて下界の情報収集をする役目を担っている。

「こたび彼が持ち込んだ話、ツチノコが夜な夜な人を襲っているというウワサであった。」

「ツチノコねえ……」

訝しげにつぶやくバイタリテイ。

「オカシラ、そもそもツチノコってなんだ？」

「そうか、ファイドは知らねえか」

組織のボスはウルトラファイドの疑問に答える。

「ツチノコってえのはな。古くから日本に伝わる、妖怪かなんかの一種だ。太ったヘビみたいな見た目をしてるんだと」

「詳しいな、オカシラ」

ウルトラファイドが感心したように言った。

「そいつが本当にツチノコかどうかはわからんが……そのウワサは俺たちにとって都合が悪い」

タカオ・マウンテンにツチノコが住んでいるという話が広がれば、密猟者が増えるだろう。シャークノイドである彼らからすれば、まったく簡単に狩ることができる相手ではある。

むしろ、仕留めれば山では手に入らない物資や金を獲得できる密猟者や違法登山者は、ヘイルドブレームズの格好の獲物であった。

だが、タカオ・マウンテン登山者が過剰に増えれば、自分たちが人間に認知される危険性が高まる。

「俺たちの居場所が研究所の連中にバレるかもしれないねえ」
もともとヘイルドブレームズ」は決まった拠点を保持していない。ひとところに固まっていると、それだけ居場所を補足される確率が上がってしまうからだ。

「どうしたもんだ、オカシラ。タカオ・マウンテン以外にも、いざという時のための手ごころな隠れ家は、いくらか見当をつけてるが……」

「縄張りの一つを、やすやすと手放すのは惜しいのも事実だ」

ウルトラファイドと相談するバイタリテイが、あごに手をやる。

「ツチノコの他の特徴は？」

「火を吹いたとかなんとかって耳にしたな。人間を黒コゲにして、頭から丸呑みしてしまう……って町の人間の女が道端で話してた」

「ほお。本当だとしたら、けっこう手強そうな相手だな」
実際に会わなければ断定できないが、ツチノコとケンカするとなると少々面倒になりそうだ。

「オカシラー！」

二人が対ツチノコ会議をしていると、外に出ていたダークレグホーンとジャージーデビルが帰ってきた。

「ただいま、ま」

ダグが手羽を上げ、ジャージーデビルがリュックサックを下ろす。

「戻ってきたか、お前たち」

振り返るウルトラファイド。

「ファイドの兄貴！ 今日には収穫だぜ！」

元氣よく戦果を報告するダークレグホーンに続いて、ジャージーデビルがリュックサックを下ろした。

「密猟者、二人倒した、た。お金、ね」

チャックを開けたジャージーデビルが、戦利品を取り

出し、

「ほら、これで鍋が買い直せるぜ」

「おお……！」

輪ゴムで止められた札束を見て、ウルトラファイドのしっぽが揺れる。

「よくやった。たつぷりのあら汁をまた食べられるようになるぞ」

あら汁とは、魚を切った時にでる残りの部分（あら）を利用した汁物の一種だ。ウルトラファイドの好物でもある。

「オカシラー。今日の夕飯はあら汁がいいな」

献立のリクエストをするウルトラファイド。自分たちが使っている鍋が壊れてしまつて以来、〈ワイルドブレームンズ〉は汁物にありつけていないのだ。

「ちようどブーツが魚採りに行つてるし」

「おう。それは構わねえが」

バイタリテイがうなずいた。彼は〈ワイルドブレームンズ〉のボスにして、調理担当メンバー二人のうちの片割れである。

「ファイドが教えてくれたツチノコの件なんだがよ」

「おっとと。すまんオカシラー、今日の夕飯より大事な問題があった」

心があら汁に支配されかけていたウルトラファイドの顔が、再びキリリとなる。

「オカシラ、どう出る。このまま放っておくのもマズいと思うぞ」

「フアイドの意見に賛成だ。よって、ツチノコ探しに町へ下りる」

バイタリテイが立ち上がった。

「ウワサの正体を見つけて、話をつけてこようぜ。場合によっちゃあ戦闘だ。(ワイルドブレイメンズ)の自由の邪魔になるようなら、ツチノコをぶっ殺してやろう」

II

カタタン、カタタン、カタタン……

軽快に線路を走る電車に、ゆっくりとブレーキがかかる。

カタタンカタタン、カタタン……

プシューッ。

「おあたせしましたあ、ななおおじ、ななおおじです」
こなれたアナウンスが五番ホームに流れ、ナナオウジ
駅に電車が到着した。まばらな人影が、電車の出入り口

を歩き交う。

そしてホームの階段を下り、駅を出てゆく人影の中に、
一人の青年あり。

電車から降りてきた青年は、右手に持っていた路線図
をズボンのポケットにしまった。

「来たか、ナナオウジ」

およそ高校生くらいの年頃に見える彼の眼光が鋭くなる。

ナナオウジに危機がせまっている。

凶暴なサメがこの地に潜伏しているやもしれぬ。

それが彼の心をざわつかせていた。

一冊のノートを取り出した青年。ノートを開くと、何
枚もの新聞記事の切り抜きが貼りつけられている。

『謎の生物 ナナオウジに出没』

『三十代男性が死亡 ツチノコに襲われる』

『ナナオウジを騒がす生物 新たな目撃証言』

……

どれもこれも、新聞の小さなスペースに収められてい
た、半ば埋め合わせめいた記事である。

いくらかの記事に目を走らせる青年は、一つの新聞記
事のところを視線を止めた。

『ナナオウジにサメ現る？ おでん屋の主人が目撃』

このような見出しの記事をにらみつける青年。

彼が今回、ナナオウジを訪れるきつかけとなった記事。「ツチノコ……サメ……」

ナナオウジにツチノコが現れた。初めはそんな与太話めいたウワサであった。

ツチノコとは、古くから日本に伝わる謎の生き物だ。かつては賞金がかけられたこともあるほどの、希少な希少な存在だとされる。

その珍しさに、ナナオウジ内ではちょっとしたツチノコブームが起こった。

ところが、いつしかツチノコによる犠牲者が現れたという話が出回り始め、人々の娯楽的な興奮はピタリと止んだ。

奇妙な生き物に襲われた。

謎の太ったへビに人が食われた。

そんな奇怪なニュースは、ナナオウジから少し離れた場所に住む青年の耳にも入ってきた。

そして。

あの新聞記事の見出しが、青年の内なる殺気を目覚めさせた。

ナナオウジでおでん屋を経営する田牧^{たまき}という人物が、どことなくサメを彷彿とさせるフォルムをした生き物を目撃した。言いようもない恐怖を感じた店主は隠れ、生き物は店主に気づくことなく去っていった……。

記事のおおまかな内容は、以上の通りだ。

「……………!」

このニュースを知った青年——清水海^{しみずうみ}時^{とき}は、急いでナナオウジのツチノコに関する情報を漁り始めた。

——もしや、ツチノコの正体はサメなのでは？

とある事件以降、サメに並々ならぬ執着を示していた者としては、サメの臭いを感じた事件に、首をつっこまずにはいられなかった。

そうして今日、いよいよツチノコが出現したナナオウジそのものへとやってきたのだ。

「まずは田牧さんから話を聞かねば」

腕時計を確認する海^{うみ}時^{とき}。少々の余裕をもって、ナナオウジに到着した。

田牧氏とのアポイントメントはすでに取ってある。本人の店で話を聞かせてくれるらしい。

もしツチノコがサメであれば……その時は。

「サメは……シャークノイドは、このオレが狩る」

海^{うみ}時^{とき}がもらした声色は、無慈悲にマグロを突き刺す鋸^{のこぎり}のように冷たかった。

ナナオウジ駅から徒歩十五分。海^{うみ}時^{とき}は無事、目的の人物と出会うことができた。

〈おでん〉と書かれた青いのれんが目印のおでん

屋に着いたのは午後四時。本当ならばまだ閉店中の時間であるが、事前に連絡をしていたため、海時はすんなりと中に入ることができた。

カラリ、と戸を開けると、店にほんのりと染みついたおでんの出汁の香りが、海時を温かく出迎える。

手狭ながらも良い店だ。と、海時は思った。

その後、裏手からやってきた店主とのあいさつの後、適当なイスに腰をかけるよう、うながされた。

海時はメモ帳とペンを取り出し、

「さっそくですが、当時の状況をお聞かせ願えないでしょうか」

ツチノコについてインタビューを開始。

「ああ」

おでん屋の店主、田牧は、サメへとたどり着く手がかかることになるかもしれない情報を持っている人物だ。

「俺はよ、店じまいをしようとしてたんだ」

語り始める田牧。

「夜中の十一時を過ぎて、のれんを片そうとした時になふつと、道路の向こうで何か動く気配がしたんだ。で、そっちの方を向いてみると、デカくて丸い何か近づいてくる」

「その『何か』が、ツチノコだったのですか？」

メモ帳にペンを走らせながら、海時が尋ねる。

「ああ。きつと、アレが例のツチノコだって思った。で、

もうその時には、ツチノコが人を食うって話があったもんだから、めっちゃくちゃにビビったんだ」

「ご無事でなによりです」

海時の言葉は本心であった。

「すみません、ツチノコについて、少々質問を致します」

そして、ズバリもつとも確かめたいこと。そのことについて、田牧に問う。

「田牧さんが出会った……ツチノコですが。そのツチノコは、サメだったのですか？」

ペンを握る海時の手に、力が入る。

「……」

サメ。かつての大戦で滅んだ恐怖の象徴。それが現代でも実は生きていた。

そんなものはオカルト話もいいところだ。本気で信じる人などいやしないだろう。

けれども、サメと口にした海時のまなざしは、真剣そのものであった。

「んー……そう、だな」

青年のまなざしを受け、田牧は肯定した。

「少なくとも、俺はそう感じたんだ」

「なるほど」

真面目な顔で、海時がメモを取る。

「今となつちやあ見間違いかもしれんがね。なんとなく、そいつはサメっぽいと思ったんだ。アレに見つかつたら

殺される。あの時感じた恐怖は、絶対サメに出会っちゃまった時の恐怖だ」

青ざめる田牧の顔。

「申し訳ありません。嫌なことを思い出させてしまいました」

「いいさ。ともかく、あいつに見つかからないようになって、俺はその場で下ろしたのれんの裏に隠れた。傍から見たらバレバレだったろうな。それでも幸い、何事もなくツチノコは去っていった」

一気に話し終えた田牧。

「信じられるか？ サメがナナオウジに現れたなんてよ。ツチノコよりも突拍子がない話さ」

「……」

田牧の言葉を聞いた海時は、メモ帳からおでん屋店主へと視線を移す。

「……その生き物が本当にサメであっても、そうでなくても。私はあなたのお話がかがいたく、お会いしたのです。貴重なお話、ありがとうございます」

彼はそう答えた後、深々と頭を下げた。

今なおサメはこの世を闊歩しており、日本を裏から支配せんと企んでいる。

そんな陰謀論じみた事実を、何も知らぬ一般市民に伝えるべきではない。海時はそう考えていた。

「……あんた、学生さん？ 丁寧な子だね」

「恐れ入ります」

と海時。

「よく言われます」

「ははは。そうかい」

田牧は笑った。

「……実はさ。ツチノコに襲われたって人の中には、うちの常連客もいたんだ」

「なんと」

「うちからアパートに帰る途中で殺されちゃったらしい。最近、やっと酒が飲めるような年になってさ。まだ若いのに、かわいそうなヤツだった……」

田牧が目元をぬぐった。

「ごめんな。こんな話をしちゃまって。清水君も、まだ若いだろ？ 心配になっちゃまった」

「いえ、そんな……」

海時はメモ帳をしまった。

「こちらこそ、お辛いことを……」

「今のナナオウジ。夜に出歩いちやいけねえよ。ツチノコは夜に目撃されてんだ。ヤツに殺されちゃうかもしれない」

「……はい。ご忠告、ありがとうございます」

海時は再び頭を下げた。

「……申し訳ありません、田牧さん。あなたの言うことを聞くことはできません。」

会ったばかりの自分の身を案じてくれる、善良なおでん屋を裏切るような行いを自分がこれからすることに、心がチクチクと痛んだ。

清水海時がナナオウジを訪れる少し前。

風変わりな三人組がナナオウジへと続く夜道を進んでいた。

「どんなヤツなんかねえ、ツチノコ」

ボロボロのコートの男の右肩に乗った三毛猫が、男の足元を歩く柴犬に話しかける。

「わからない。ゆえに用心が必要だ」

柴犬の返事。

この犬と猫は普通存在ではない。野生のサメ組織（ワイルドブレームズ）のメンバー、ウルトラファイドとロングブーツである。

（ワイルドブレームズ）のボス、バイタリテイは、この二体のアニマルシャークノイドを連れてナナオウジにやってきた。

自分たちの自由を脅かしかねない存在、すなわち、ナ

ナオウジのツチノコを探すためである。

「ファイド。ツチノコは夜に現れるって言ってたな？」

「ああ。ナナオウジのツチノコは夜に潜み、住人を食らう。満腹になるとタカオ・マウンテンに帰り、腹が減るとまた山を下りてエサを探すんだとさ」

「ケツ。アタシらにとつちや迷惑なウワサだ」

ロングブーツが文句を垂れた。

「なんでよりによってタカオ・マウンテンに住んでる、なんてことになってしまったんだ」

彼女もウルトラファイドと同じく、町に下りて情報収集を行う（ワイルドブレームズ）の一員だ。

バイタリテイが、二人をツチノコ搜索メンバーに選んだ理由である。

「お前らが最後にここへ来たのは五日前だったな。ツチノコらしいヤツは見なかったのか？」

「いなかった……よな？」

「そうだな。私もブーツも見ていないぞ、オカシラ」

ウルトラファイドとロングブーツが目を合わせる。

「じゃあねえ。適当に探すぞ」

自らの縄張りを守るための、ツチノコ搜索が火蓋を切った。

（ワイルドブレームズ）においてナナオウジの地理を一番把握しているのは、ウルトラファイドとロングブーツであった。

バイタリテイはナナオウジに明るい二人の意見を吟味しながら、町を徘徊する。

「やっぱりやだよなあ、このヒモは」

怪しまれないように、ウルトラファイドはペット用リードと首輪をつけられていた。どこからどう見ても、この一団は散歩をする犬とその飼い主になっている。

すばらしい変装であった。

「よく似合ってるよ、ファイド」

バイタリテイの肩に乗ったロングブーツがケラケラと笑う。

「うるさい」

リードにつながれたウルトラファイドが、不満そうな声を上げた。

「ブーツもヒモにつないでもらって、自分の足で歩くか？」

「遠慮しとくわ」

「そう言うな。最近は何もつける猫も増えているみたいじゃないか……」

ウルトラファイドがさらに何か言おうとした時に、人影が前方から現れた。

ピタリ、と口をつぐんだ二人。

自分たちがアニマルシャーケイドであることがバレたら面倒だ。

「……………」

バイタリテイたちとすれちがったナナオウジ市民は、彼らを怪しむことなくそのまま通り過ぎて行った。

「……ファイド、ブーツ、もういい。案内頼むぜ」

辺りを見回し、他の住民がいらないことを確認すると、バイタリテイが口を開いた。

「俺をツチノコのところまで連れて行くんだ」

バイタリテイ一行がナナオウジで探索を開始してから、すでにそれなりの時間が経過していた。

日付けは十二時をとうに回っていたが、そここにある町の明かりと、事前に購入した懐中電灯のおかげで、光源には困らなかつた。

人工的な光は、ここが自分たちの隠れ家たるタカオ・マウンテンではなく、人間の支配する領域であることをまざまざと感ぜさせる。

「ツチノコってどのくらい強いんだろ」

「うーむ。巨大アオダイショウよりも強いんじゃないか？」

ウルトラファイドとロングブーツも、しゃべるのに遠慮がなくなってきた。深夜になり、町を歩く人がめっきり減っているのだ。

「巨大アオダイショウかあ。名前聞いたらお腹が減ってきたな」

ロングブーツが腹をさすった。タカオ・マウンテンに生息する巨大アオダイショウは、砂糖醤油に漬けて蒲焼

きにするとうまいのだ。

「こう、コゲ目がつくほどあぶった蒲焼きにさ。一気にかぶりつきたいよ」

「うわーっ、やめろやめろ。私まで腹が減ってくる」

ウルトラファイドがそう言うってフルフルと首を振った後、

「……あ、そういえば」

彼は顔を上げた。

大事なことを思い出したのだ。

「ブーツ、オカシラ。醤油の在庫が切れかけていなかったか？」

「あー……？ ああーっ！」

料理担当二人が声を上げる。

「すっかり忘れてたぜ」

「よく覚えてたな、ファイド」

しゃがんだバイタリテイは、犬のふりをして歩くファイドの頭をワシワシとなでた。

「ツチノコを探し終わったら買っとこか、醤油」

「オカシラ、財布はあるのか？」

「おう。財布にいくら入ってたかな……」

密猟者二人を狩ったばかりだ。資金に余裕はあるはずだが、ほとんどは隠れ家に保管している。

財布にはいくら仕込んでおいただろうか。

「どれどれ」

バイタリテイはガマ口財布を取り出し、パチリと口を開けた。

「なんだ、ちゃんと千円札入れてきてるじゃねえか」

と、バイタリテイ。

「これなら安心だぜ……」

「オカシラ！」

不意にロングブーツが叫んだ。

「なんだブーツ」

「ツチノコだ！」

「なんだと！」

バイタリテイはガマ口を閉じ、コートのポケットに財布を突っ込んだ。

「どこにいる！」

立ち上がったウルトラファイドが、邪魔なリードを引きちぎる。

やる気満々だ。

「今あそこの角を曲がった！」

ロングブーツもバイタリテイの肩から飛び降りる。

「行くぜお前ら！」

標的を見つけ、駆け出した三人のアニマルシャークノイド。

「教えてもらおうじゃねえか、ナナオウジをうろつく目的をよ！」

ツチノコ騒ぎが起こる以前より、夜のナナオウジの人は通りは半分以下になっていた。

重い足取りで帰路につく、痛ましいほどに遅くまで残業をしてきたサラリーマンが、夕飯後に腹を減らして近くのコンビニまで買い出しに出かけた一人暮らしが、ちらほらと目につく。

そんな人通りの中では、海時は明らかに若かった。

そう。彼はナナオウジの夜に繰り出したのだ。

ツチノコに直接出くわした、おでん屋の田牧が警告したにも関わらず。

今、夜を出歩くのは危険ではないか？ ツチノコに殺されてしまうのではないか？

当然、承知の上だ。

すでにこのツチノコ捜索に関しては、師匠に許可は取っている。

「いちおう俺も海時の保護者だ。夜、一人で学生が出歩くのは感心せんが、お前はガンコだからなあ」

ナナオウジに潜むサメの調査に行く、なんなら向こうで泊まることになる。

かき集めた新聞記事の切り抜きを示しながら海時が申し立てをした時、彼の師匠である富士宮甲呀ふじみやこうがは、半ばあきらめたようにため息をついた。

「……申し訳ありません」

「まあ……海時もそこのシャークノイドにやられるよいうなヤツでもないのはわかっている。ただ、ムチャだけはするなよ。助けが必要なら呼べ」

「重々、承知しています」

心の中の師匠と田牧さんに謝りながら、海時はナナオウジを歩き回った。

今日聞いた話が事実であるならば、やはりツチノコはシャークノイドである可能性が高い。そうでなくとも、人に危害を加える魔物を放ってはおけない。

「サメは狩る」

その決意をもって、彼はツチノコを探した。

しかし、推定サメの未確認生物への殺意とは裏腹に、今日の夜も、次の日の夜も、その次の日の夜も、目的のツチノコに出会うことは叶わなかった。

なぜなら件のツチノコは、すでにナナオウジにはいなかったからである。

III

タカオ・マウンテンの奥深くに暮らすのは、異形のアニマルシャークノイド集団（ワイルドブレームズ）である。

彼らを統率するのは、ホジロ・シャーク因子の捕食者たる人工シャークノイド、バイタリテイ。

メンバーはサブリーダーであるウルトラフアイドを筆頭に、三毛猫のロングブーツ、ニワトリのダークレグホーン、ロボのジャージーデビルの計四体。

人間たちによる束縛を嫌い、暗黒サメ組織から抜け出した彼らは互いに協力し合い、厳しい世の中を生き延びていた。

そんな生存欲たくましい組織の輪の中に、新たに加わった一体のアニマルシャークノイドがいた。

「どうだ、ファイアフラワー。これがあら汁だ」

ほら穴の中にこしらえた食卓の中心にあるのは、町に下りて買い直した、ピカピカの大鍋。湯気が立ち、風味豊かな香りがほら穴を包んでいる。

（ワイルドブレームズ）の今日の夕飯は、川で捕まえてきた魚を使ったあら汁であった。

「うまいか？」

マイ・ハシとお椀を両手に持ちながら、ウルトラフアイドは隣に座ったツチノコに顔を向けた。

ツチノコは、お椀にがついていた顔を上げ、コクコクとうなずく。ツチノコには手がなかったので、ハシを使わず、お椀から直接スープを食べているのだ。

「当然だ。アタシが作ったんだからな」

エプロンをつけたまま夕飯を食べているのは、今日の料理当番であったロングブーツ。

「今まで残飯や人間しか食ってこなかったなんて、ひもじかったろう。たんとお食べよ」

普段はブレームズメンバー（もっぱらウルトラフアイド）をからかって遊んでいるロングブーツも、新入りに対しては優しくかった。

「おかわりいるかい？」

彼女は空になったツチノコのお椀を掴む。

「……？」

遠慮がちに、キョロキョロとブレームズを見回すツチノコ。

彼らの目を見て安心したのか、ツチノコはコクリ、コクリとうなずいた。

すずにお気づきの方もおられよう。

（ワイルドブレームズ）の面々と共に鍋を囲むツチノコは、ナナオウジでウワサの、恐怖の人食いツチノコであった。

彼は夜のナナオウジをさまよっているところを、バイタリテイに拾われたのだ。

「なんてこった。ツチノコってえのはシャークノイドだったのかよ」

あの夜、自分を突然追いかけてまわしたバイタリテイ一行に追いつめられた時、ツチノコはへビににらまれたカエルのようになっていた。

この男は強い。理屈ではなく、直感で察した。

すっかり死への覚悟をした。

「こいつ食っちゃまうか」

「待てブーツ。とりあえずは交渉を試みよう。色々と情報が手に入るやもしれん。この様子だと、抵抗する気もなさそうだしな」

だが、眼前のシャークノイドたちは、闘争心をむき出しにしながらも、すぐに自分を殺そうとはしなかった。

「じゃ、インタビューというぜ。おいてめえ、いったい何が目的だ？」

ツチノコは彼らの質問に、素直に答えていった。言語を操る力は持っていなかったのだ、首を縦に振るか、横に振るかだ。

そうすれば、ひとまず痛めつけられることはないだろ

う、と感じたからだ。

十数分後、ツチノコに対するインタビューは終了した。

「……つまり、アレか。お前はトリノスナ研究所を抜け出した、アニマルシャークノイドってことか」

何度も質問を重ね、ツチノコに結論を投げかけるバイタリテイ。

当初のギラついた目つきは、すっかり治まっていた。

「流れ流れてナナオウジにたどり着き、ずっと隠れてすごしてきた、と」

コクリ、と首肯するツチノコ。

「時おり頭の中がぼんやりする。自分が自分でなくなるかのように。そのことにおびえながら、このナナオウジで、一人で、隠れて」

コクリ、コクリ。

「我々と同類か……」

ウルトラファイドのしっぽが垂れる。（ワイルドブレームズ）を結成した動物たちは、トリノスナ研究所からの脱走者だ。

「オカシラ、こいつかわいそうだよ」

ロングブーツがバイタリテイのコートを引っ張る。三人の中ではもっともツチノコを殺す気でいた彼女であったが、その動作は「あんまりツチノコをいじめないでくれ」と暗に訴えかけていた。

「……」

バイタリテイはしやがんだ。

「なあ、ツチノコよお」

彼はツチノコと視線を合わせ、正面から見据える。

「お前。俺たちと一緒に来いよ」

そうして、ツチノコはバイタリテイに連れられ、タカオ・マウンテンにやってきた。ここが彼の新たな住み処となった。

ツチノコはタカオ・マウンテンに住む。偶然にも、ウサ通りとなった形である。

「つーわけで。こいつを（ワイルドブレイメンズ）の新メンバーに加えることにした」

隠れ家に帰ると、バイタリテイは留守番をしていたダークレグホーンとジャージーデビルに、事のいきさつを話した。

「お前ら、ちゃんと面倒見てやれ」

バイタリテイの言葉に続き、ちよこん、とツチノコが頭を下げる。

「やったな、ジャビー！ お前の後輩だぞ」

「後輩、い！」

長らく組織一の新米であったジャージーデビルの、喜びの声が上がる。

「名前はファイアフラワーというらしい」

ファイアフラワー。ツチノコが唯一発した言葉である。シャーク因子が体に取り込まれた時、魂に刻まれた名

前であった。

「お前は誰かの道具じゃねえ。これから生き方を教えてやる、ファイアフラワー」

仲間が増えた（ワイルドブレイメンズ）であったが、彼らの生活が大きく変わることはなかった。ただひたすらに、意思と自由と誇りを胸に、野生の中で生きようとしていた。

しかしそれは、ファイアフラワーにとっては、依然と比べてあまりに様変わりした毎日だったのである。

人工自然と旧世紀以前の自然が入り混じった野生の地、タカオ・マウンテン。人の町にはない危険に溢れた環境であったが、それでもファイアフラワーは、これほどまでに充実した場所はないと思えた。

初めてニホンバイソンの狩りに参加した時、ファイアフラワーは目覚ましい活躍を見せた。

ウルトラファイドとダークレグホーンが追い立てたニホンバイソンの不意を突き、木の上から躍りかかったファイアフラワー。火花をまとった彼の突進が、かの大物にとどめを刺した。

「やったーッ！」

「やったーッ！」

倒れたニホンバイソンの周囲で、バンザイをするブレイメンズ。

「お手柄だぜ、ファイアフラワー」

バイタリテイにほめられ、ファイアフラワーはコクリ、コクリとうなずいた。
自分を受け入れてくれた（ワイルドブレイメンズ）との日々はたまらなく楽しかった。
ツチノコは孤独ではなくなったのだ。

IV

人工の光が地上を照らす町とは違い、タカオ・マウンテンより見上げる夜空からは、星々の輝きを鮮明に拝むことができた。

星の光は、タカオ・マウンテンに暮らすすべての生き物を平等に照らす。アニマルシャークノイドである（ワイルドブレイメンズ）にも同様に。

「……」
ファイアフラワーは、人の町にいたままでは知ることのない、まばゆい夜の空を見上げていた。

「……………」
なんてことはない。一匹のシャークノイドがたたずむ

光景である。

けれど……よく考えてみれば、これはおかしな光景ではないか？

すでにファイアフラワーは、（ワイルドブレイメンズ）の一員である。新参者である彼は、ほとんどの時間をブレイメンズメンバーの誰かと共に行動していた。

その彼が、たった一人で真夜中に、ブレイメンズの隠れ家から離れた場所にいるのは、何か理由があるのだろうか？

「……………」

微動だにしないファイアフラワー。

「ファイアフラ、ワー」

そこへ、背後から声をかける者がいた。

「どうしたの、の？」

ひよろ長い手足を動かしながらやってきた彼は、ジャーデビル。

「眠れない、い？」

ほら穴で寝静まっていたアニマルシャークノイドたちの中で、ふとした拍子に目覚めてしまったのはジャーデビルであった。

「……あれ？」

ファイアフラワーがいらないことに気づいた彼は、すぐさまほら穴を飛びだした。

用心深い（ワイルドブレイメンズ）は、隠れ家の入り

口に鳴子なるこを仕掛けている。鳴子とは、音を立てて侵入者の襲撃を知らせる恐ろしいトラップである。

仕掛けたトラップは鳴子だけではない。付近には数ヶ所の落とし穴まで掘ってある。落とし穴の位置を把握しているのは「ワイルドブレイメンズ」のメンバーのみ。

これらの巧妙なトラップは、彼らが潜伏しているほら穴を攻めることを困難なものとしている。

しかし、いずれのトラップも作動した気配はない。何かに襲われたわけではない。

自分から隠れ家を抜け出したということか。

ともかく、臆病な後輩が心配でたまらなくなったジャーゼルは、ファイアフラワーの搜索を開始。ややあつて、無事にファイアフラワーを見つけ出した、というわけである。

「どうしたの、の？」

何も反応しないファイアフラワー。

ジャーゼルデビルが一步、近づく。
すると。

ブルツ、とファイアフラワーが震えた。

「……」

振り向くファイアフラワー。

「ファイア……」

ジャーゼルデビルは息をのんだ。

ファイアフラワーの目つきが明らかにおかしい。

「グルルル……」

何かに取り憑かれたように、ファイアフラワーは喉のどを鳴らす。

「大丈夫、ぶ？」

ジャーゼルデビルがさらに近づく。

ファイアフラワーの目が、星空を反射して光った。

「ツチアアアアアア！」

なんたることか！ ファイアフラワーは仲間のジャーゼルデビルに襲いかかったのだ！

「！」

飛び跳ねたファイアフラワーは、ジャーゼルデビルの喉元を狙う。

速い！ これがナナオウジの人間を殺してきた彼のシヤークノイドとしての力だ！

しかし、今回の相手は人間ではなく、ファイアフラワーと同じシヤークノイドである。

「ぐう！」

左腕で首をかばったジャーゼルデビル。急所に牙を突き立てられるのは避けることができた。

「グルルル……！！」

しかしファイアフラワーは、ジャーゼルデビルの腕にかみついたまま離れない。

無抵抗のままではやられる。

「ごめ、ん！」

ジャージーデビルはファイアフラワールの鼻面を、無傷の右手で殴りつけた。

たまたま彼の腕から離れるファイアフラワー。地面に着地した彼は、まったく敵意を持ってジャージーデビルと向かい合った。

「ツ……ツチイ！」

ファイアフラワーの身体をまとう、サメを彷彿とさせる戦闘服。

「ツチアアアッ！」

シャークスーツを着たファイアフラワーは、完全に戦闘モードとなった。

「しようがな、いっ！」

対抗すべく、ジャージーデビルもシャークスーツを身に着ける。

それでも。

ジャージーデビルに戦意はなかった。

「ファイアフラ、ワー。なんで、で？」

困惑の色を見せるジャージーデビルに答えることなく、「ツチイ！」

ファイアフラワーは地を這い、ジャージーデビルに攻撃を仕掛ける。

狙いは足だ。

ジャージーデビルは狙われた左足を振り上げた。先ほ

どまでスネのあった箇所を通り過ぎるファイアフラワー。

「ターツ！」

そのまま背後に回ろうとするツチノコに、ジャージーデビルは蹴りを入れた。

地面を転がっていくファイアフラワー。だが、すぐに態勢を立て直す。

ダメージが浅いのだ。

「やめて、て！」

ジャージーデビルにとつて、ファイアフラワーは大切な後輩だ。本気のキックができないのである。

一方のファイアフラワーは、相手が「ワイルドブレームズ」のメンバーであろうとお構いなしであった。

「ツチアアアアア！」

ファイアフラワーの恐るべき連続かみつき攻撃！
血走った眼は、未確認生物めいた悪夢だ！

凶暴化したファイアフラワーであったが、彼はシャークノイドとの戦闘経験はない。実践経験で言えば、ジャージーデビルの方が数段勝っていた。

しかれど……ジャージーデビルの方が、徐々に押さされているではないか。

「ターツ！」

ジャージーデビルが足元のツチノコを蹴り上げる。宙に飛ばされたツチノコに、彼は正拳突きを見舞った。

本来ならば、かなりの痛手を与えられる一撃。そのは

ずであったが。

「グルル……グルルルル………!!」

うなるファイアフラワー。

やはりダメージが浅い。

ジャージーデビルには、どうしても仲間を傷つけることにためらいがあるのだ。

「ファイア、落ち着いて、て！」

先輩の必死の言葉も、ファイアフラワーに届く様子はない。

「グ……グル………!!」

ナナオウジの人食いツチノコから、バチバチと火花が散り始める。体を丸め、自分のしっぽを啜くわえたツチノコから、さらなる火花。

「………!!」

この構えを、ジャージーデビルは知っていた。高い耐久力を誇るニホンバイソンをも仕留めた技だ。

「バチッ! バチバチバチッ！」

「グルチャツアアアアッ！」

まさに生きた花火玉! すでに右足にダメージを負っていたジャージーデビルの対応が遅れる!

避けきれないと判断したジャージーデビルは、とっさに両腕をクロスさせた。

「ツチイイイイイッ！」

防御の上からの、ファイアフラワーの無慈悲な火花タ

ツクル。

ジャージーデビルは吹き飛んだ。

ファイアフラワーの攻撃を直接受けた両腕から、立ち上る煙。

決定的な一撃を喰らった、ジャージーデビル。

「う………」

このままでは負けるだろう。

殺すしかないのか。

だけど。

ファイアフラワーは、初めてできた自分のかわいい後輩なのだ。同じ〈ワイルドブレイメンズ〉の仲間なのだ。

それを殺すのか?

ジャージーデビルが逡巡していると、

「あっ!!」

突如として、ファイアフラワーが背を向ける。

ツチノコはその場から逃げ出した。

「待って!!」

そう叫ぶジャージーデビルだが、全力でタカオ・マウンテンを下ってゆくファイアフラワーを追いかけるには、いささかダメージを受けすぎていた。

「そんな、な………」

ガクリ、とジャージーデビルは膝ひざをついた。

いったい、ファイアフラワーに何が起こってしまったのか。

「オカシラ、こつちだ！」

と、聞き覚えのある声が響いた。

「……ジャビー！」

息を切らして駆けてきたのは、身の丈二メートルを超す柴犬。シャーク因子の能力により、戦闘形態となったウルトラファイドだ。

「無事か！」

彼以外のブレーメンズのメンバーたちも続々とやってくる。

「みんな、な」

「その傷はどうした！」

ダークレグホーンが、コゲたジャージーデビルの腕を見て叫んだ。

「ファ、ファイアフラワーが……」

「そう、そうなんよ。あんたに加えてファイアフラワーまでいなくなっちゃったんよ」

「何かあったのか、ジャビー」

ロングブーツとウルトラファイドが、ジャージーデビルを抱え起こす。

「ファイアフラワーが、ファイアフラワーがッ……！」

言葉にならない悲しみのせいで、ジャージーデビルは姿を消した後輩の名を呼ぶことしかできなかった。